

## 南スマトラ州の言語

三 谷 恭 之\*

### Languages of South Sumatra

Yasuyuki MITANI\*

#### はじめに

南スマトラの住民がかつてはどの地域に住み、そこからどのようにしてその居住地域を移動拡大してきたのか、もとよりその正確な過程をあとづけることは困難であろうが、言語、方言の分布状況とそれらの相互関係を明らかにすることは少なくともその手掛りを与えてくれるに違いない。今回私が行なった現地調査の目的もおよそのようなところにあ

った。調査はわずか2カ月足らずの短期間であったので、多くを望まず、主だった方言について約200語ほどの基礎語彙を集録するにとどめた。本稿は主としてその調査資料に基づいて、南スマトラ州の言語、方言の分布概況とそれらの間の歴史的な関係について考察しようというものである。

#### I 南スマトラ州の言語分布

今回調査した限りでは、南スマトラ州各地で話される言語は大別してマレー語 (Bahasa Melayu) の方言とランポン語 (Bahasa Lampung) の方言に分けることができる。ランポン系の言語は同州の東南部、およそカユアグン (Kayu Agung) からラナウ (Ranau) 湖の間の主としてコムリン (Komerling) 川の流域に分布し、ランポン語分布地域としてはいわばランポン (Lampung) 州の外延部を形成している。南スマトラ州のそれ以外の地域はおそらく大部分がもっぱらマレー語が話される

地域であり、同じマレー語分布地域であるジャンビ (Jambi) 州につながっているものと思われる。ただし今回の調査ではブギス (Bugis) 人、ジャワからの入植者、スマトラ原住民といわれるいわゆるクブ (Kubu) 族などの言語については調査する機会がなかった。

マレー語、ランポン語は、ジャワやスマトラの他の諸言語と同様に、系統的にはオーストロネシア語族ヘスペロネシア語派西インドネシア語群に属するものとされている。このうちのマレー語、ランポン語、ジャワ語の三つを比較すると、一応マレー語とランポン語が近いようにはみえるけれども、ランポン語

\* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

に対するマレー語の影響といったことも考慮するならば、直ちにどれとどれが近いのか断定することは難しい。いずれにせよ基礎語彙中の共通語彙の割合は3～4割かせいぜい4割少々であって、およそ2,000年台とか3,000年台とかの開きがあるものと思われる。<sup>1)</sup>

先に述べたように南スマトラ州におけるランポン系言語の分布地域は同州東南部、カユアグンより上流の地域である。カユアグン、正確に言えばマルガ・カユアグン (Marga Kayu Agung) では2種類のランポン語が話される。カユアグン語 (Bahasa Kayu Agung) とカユアグンアスリ語 (Bahasa Kayu Agung Asli) である。カユアグン語は、今回調査した南スマトラ州ランポン語の中では最も異質な方言であって、ただ一つ、ランポン語2大区分の一つであるアブン語 (Abung) のグループに属している。アブン語はムンガラ (Menggala) など主としてランポン州の中部、東部で話されるランポン語である。これ以外は、カユアグンアスリ語をも含めて、すべて非アブン系のランポン語であった。カユアグンアスリ語は‘本地カユアグン語’とでも訳すべきもので、現在ではカユアグンの中でコタ・カユアグン (Kota Kayu Agung) の1ドゥスン (dusun) で話されるのみであるが、この地にカユアグン語がムンガラ辺りからもたらされる以前より存続していたものと思われる。カユアグン語に似ているが、もともとはコムリン語の方言であったと考えられる。

コムリン語 (Bahasa Komoring, コムリン語では Basa Kumoring) という名称は必ずしもその用法が一定せず、最も広い意味では

南スマトラ州ランポン語のすべてを指すことがある。本稿ではこれをより狭い意味に用いて、タンジョンルブック (Tanjung Lubuk) からマルタプラ (Martapura) までのコムリン川流域各村の方言に限定する。本来のコムリン語である。ただし、このうちムンチャクカバウ (Muncak Kabau) からマルタプラまでの方言は他の方言と異質なところがあり、現地でもこれをコムリンブアイ語またはブアイ語 (Bahasa Komering Buay, Bahasa Buay) と呼んで、本来のコムリン語から区別することがある。

マルタプラを過ぎると、ブンガマヤン (Bunga Mayang) からムアラドゥア (Muara Dua) にかけてダヤ語 (Bahasa Daya, または Bahasa Komering Daya) が分布する。ダヤ語の正確な分布は分からないが、一部はムアラドゥアより北のルンカヤップ (Lengkayap) にも広がっている。ただし地理的にコムリン語と接するブンガマヤンのダヤ語は、現地ではダヤ、コムリンダヤなどとは呼ばずに単にコムリン語という。<sup>2)</sup> それよりさらに山に向かってラナウ湖にいたるとラナウ語 (Bahasa Ranau) が話される。ラナウ語はランポン州西南岸のクロエ方言 (Kroë, 最近の綴り字では Krui) に近く、おそらくラナウ語はラナウからランポン州に通じる道路に沿ってランポン州の方へ分布しているものと思われる。

このほか、ブリタン (Belitang) の‘コムリンアスリ語’をはじめ、ランポン州との隣接地域では別の方言が話されると思われ、アブン系かコムリン語に近い興味ある所である

1) 言語年代学的計算については拙稿 [1977] を参照。ただし修正値の算出のしかたについて若干改めるべき点がある。また、本稿で用いた基礎語彙はスワデシュの200項目のうち比較的安定度が高いと思われるものを150～170項目ほど選んであるので、平均残存率を若干高い目にとる必要がある。

2) 正確には Komering Ulu という。しかし Komering 語を Komering Ulu と Komering Ilir に分けた場合、Komering Ilir は OKI 県 (Kabupaten Ogan dan Komering Ilir) の方言、Komering Ulu は OKU 県 (Kabupaten Ogan dan Komering Ulu) の方言を指すようであって、実質的には Komering Ulu と本稿でのコムリン語はほぼ等しい。

が、今回は調査することができなかった。

以上のランボン語分布地域にもマレー人—主としてオガン語を話す—も居住し、またランボン語系の住民もたいていオガン語、パレンバン語などのマレー語をよくするが、南スマトラ州のこれ以外の地域はもっぱらマレー語の方言が話される地域である。南スマトラ州マレー語は、一応、高地マレー語 (Highland Malay) とそれ以外—普通の、いわゆる広い意味でのリアウマレー語 (Riau Malay) に属すると思われるもの—とに2大別することができる。

主としてラハット (Lahat) 県の山地部を中心に分布する高地マレー語は従来 'Middle Malay' と呼ばれたものにほぼ対応し、<sup>3)</sup> 異なった名前のいろいろな方言があるがいずれも大体よく似ている。その分布は、パガルアラムを含むいわゆるパスマ (Pasemah) 地方のパスマ語 (Bahasa Pasemah) を中心として、そこから四方に広がった恰好になっている。すなわち、東から東南にかけてはスムンド語 (Bahasa Semendo) が、ムアラドゥアキサム (Muara Dua Kisam), プラウブリング (Pulau Beringin), ムカカウイリル (Mukakau Iilir) といった辺りまで分布し、北から東北にかけてはルマタン語 (Bahasa Lematang), エニム語 (Bahasa Enim) と呼ばれるよく似た方言がおよそムアラエニム (Muara Enim) 周辺にいたるまで分布、<sup>4)</sup> 西ないし西北の地域にはキキム語 (Bahasa Kikim), リンタン語またはアンパットラワン語 (Bahasa Lintang, Bahasa Empat Lawang) など一群の方言が、後述のムシ語 (Bahasa Musi) の方言と混じり合っ、トゥビンティンギ (Tebing Tinggi) の辺りまで分布—トゥビンティンギではトゥビン語 (Bahasa Tebing) という—

3) Voorhoeve [1955] 参照。

4) ただし、ルマタン (Lematang) 川の下流はムシ系の方言である。

南のブンクル (Bengkulu) 州にはスラウァイ語 (Bahasa Serawai) が分布する。

今一つ、おそらくこの高地マレー語の分派と思われるのがオガン語のグループである。オガン語 (Bahasa Ogan) はバトゥラジャ (Batu Raja) をはじめ主としてオガン (Ogan) 川流域で話されるマレー語であるが、同時にコムリン川流域やラナウ周辺でもパレンバン語とともに半ば共通語的に使われているようにみうけられる。その分布は比較的下流にまで広がっており、タンジョンルブック北部のプガガンウル語 (Bahasa Pegagan Ulu),<sup>5)</sup> コムリン川よりさらに東のプダマラン (Pedamaran) のマレー語 (Bahasa Pedamaran) などもオガン語のグループに属する。

一方、主としてムシ (Musi) 川流域に分布するムシ語のグループは、高地マレー語に比較すれば、標準的な半島マレー語により近いものである。このグループにはいわゆるムシ語とラワス語 (Bahasa Rawas) が含まれる。ムシ語という名称は必ずしも一般的ではなく、たとえばスカユ (Sekayu), ババットマン (Babat Toman) などムシ川中流域ではスカユ語 (Bahasa Sekayu), 上流のムアラクリンギ (Muara Kelingi) 出身者は自分の方言をムシウル語 (Bahasa Musi Ulu), ムアラサリン (Muara Saling) 周辺ではサリン語 (Bahasa Saling), といった具合にそれぞれの地名、地方名で呼ぶが、サリン語が音韻面で特徴的であるほかは大体よく似ている。ラワス語はムアラルピット (Muara Rupit) 近辺出身者の方言ラワスイリル語 (Bahasa Rawas Iilir) を調査したのみであるので詳しいことは分からないが、おそらくムシ語に近いものであろう。

このグループは東にはパレンバン周辺まで分布地を広げており、パレンバン南方およそ

5) ただし、プガガンイリル語はムシ系であると推測される(後述)。

タンジョンラジャ (Tanjung Raja) 辺りまでのオガン川より西側の方言は大体このグループに属するものと思われる。プラブムリ (Prabumulih) 北方, グルンバン (Gelumbang) のブリダ語 (Bahasa Belidah) がそうであり, 若干異なった特徴をもつがタンジョンバトゥ (Tanjung Batu) のプナサック語またはムランジャット語 (Bahasa Penasak, Bahasa Meranjat) も基本的にはおそらくこのグループに属する。インドララヤ (Indralaya), タンジョンラジャのプガガンイリル語 (Bahasa Pegagan Ilir) を調査し残したのは残念だが, 坪内良博氏の論文から判断するとこれもムシ語の一種であろうと推測される。さらにオガン川, コムリン川以東の地域にも, たとえば, トゥルンストラパン (Tulung Selapan) のカユアロー (Kayu Aro) の方言は明らかにムシ語であり, このような集落がほかにも散在するものと思われる。

パレンバン語 (Bahasa Palembang, パレンバン語では Baso Palembang) はパレンバン市内とその近郊で共通語的に用いられるマレー語で, 生粋のパレンバン語にはジャワ語の影響が顕著である。その点で共時的には第3のグループとみなしてもよいのであるが, その母体となったマレー語は, ムシ語ではないにしても, やはり半島マレー語に近いものと

思われる。パレンバン周辺の方言も概ね同様である。ムシ川下流のムアラトラン (Muara Telang) の方言はほとんどパレンバン語と同じであるし, 河口部の漁村スンサン (Sung Sang) の方言はジャワ語要素も多く, いろいろな方言が混じっていると思われるが, 基本的には半島マレー語に近いものである。しかしパレンバン南方のシラプラウパダン (Sirah Pulau Padang), パンパンガン (Pampangan), トゥルンストラパンなどの方言になると必ずしもすっきりしない点がある。このことについてはあとでまた触れるであろう。

以上のほかに, OKU 県の1マルガ, ムアラドゥアのマルガ・アジ (Marga Aji) のみで話されるアジ語またはハジ語 (Bahasa Aji, Haji) というのがあって, 現地の人々はこれをコムリン語, ダヤ語, オガン語, インドネシア語, ジャワ語などあちこちから少しずつ単語を借りてできた言葉だといってよく話題にする。確かに一見ただけではマレー系かランボン系か直ちには分らない。筆者は今のところ基本的にはマレー語の一種と考えているが, まだ未解決の点もあり, 言語学的な関心は別として本稿の主旨にとっては必ずしも重大な問題ではないと思うので, この言語については別稿にゆずりたいと思う。

## II ランボン語の方言分類

ランボン語の方言分類については, Walker [1975, 1976] がある。主としてランボン州の方言に関するものであるが, それによると, ランボン語の方言はアブン語 (Abung) と呼ばれるグループとプシシルまたはパミンギル (Pesisir, Paminggir) と呼ばれるグループとに大別される。後者は海岸ランボン語とでも訳すべきものである。アブン語の分布地域は正確なことは分からないが大体ランボン州の

中部および東部の低地と思われ, Walker [1975] ではムンガラ (Menggala), コタブミ (Kota Bumi), ジャブン (Jabung) の方言がこれに含まれる。一方のパミンギル語のグループは同州南部と西南部の海岸およびその内陸山地部に分布し, ラナウ語やコムリン語もこのグループに属するという。筆者もこの2大区分には異論がないのだが, パミンギル語という名称をコムリン語まで含めて用いるのは

いかにも不適切であるし、アブン語以外が全体としてアブン語と同程度にまとまったグループというわけでもないので、この名称はもう少し狭い意味に限定して用いたいと思う。

南スマトラ州ランボン語の中ではカユアグン語がアブン語のグループに属する。このことはカユアグン語が次のようなアブン語特有の語をもつことから知ることができる。

	カユアグン語	アブン語 (ランボン州)	他のランボン語 <sup>6)</sup>
‘歯’	kodis	kedis	ipon
‘魚’	punyu	punyu	iwa, iwak
‘日’	panas	panas	rani, harani
‘太陽’	matépanas	matopanas	matarani, mataharani
‘黒い’	harong	areng	halom, alom
‘短い’	mobah	ibah	buntak (一部: rebah)
‘何’	onyi (<-é ?)	nyo, -ou	api
‘どこ’	dékudé	dikedo, -ou	dipa, didipa
‘来る’	mogo	megeu	ratong
‘焼く’	pulpul	pepul, pupul	nyuah, suah

また約150項目の基礎語彙における共通語彙の割合は、アブン語以外のランボン語との間では一般に6~7割であるのに対し、アブン語との間では約8割であった。例外はカユアグンアスリ語と、もともとカユアグンアスリ語が最も近かったと思われるタンジョングックのコムリン語で、この2方言との間にも約8割かそれ以上の共通語彙があるが、これはカユアグン語とカユアグンアスリ語の相互影響の直接間接の反映、地理的理由による共通のマレー系借用語の存在といった理由によるものと考えられる。実際またカユアグン語がアブン語の支流であることはカユアグンにおける伝説ともよく一致する。すなわち、カユアグンの住民の祖先はアブン人(Orang A-bung)であり、ムンガラからルンプイン(Lempuing)川流域を経てカユアグンに来たというのである。

次に、アブン語以外のランボン語方言は、Walker [1976] では(1)コムリン語、(2)クロエ方言(Krui)、(3)南部諸方言、(4)プビアン語(Pubian)の4グループに分類しているが、Walker [1975] にみえるスンカイ語(Sung-kai)を第5グループとしてこれに加えるべき

であろう。このうちの(2)のグループには明らかにラナウ語が含まれる。(3)に属する方言としてはコタアグン(Kota Agung)、ワイリマ(Way Lima)、カリアンダ(Kalianda)、トルクブトゥン(Teluk Betung)などランボン州南部海岸の諸方言が挙げられており、おそらくWalker [1975] のタランパダン(Talang Padang)の方言もこのグループに含まれる。Walkerの資料ではプビアン語とスンカイ語の位置が明記されていないが、前者はランボン州中南部、後者は同州北西部のどこかでおそらくマルタプラの東南方にあたると思われる。

比較的はっきりしていることは(2)のラナウ・クロエ語と(3)の南部諸方言が相対的に近く、(1)のコムリン語と明瞭に区別できるということである。次の例を参照。

	ラナウ・クロエ, 南部諸方言	コムリン語
‘手’	culuk (カリアンダ: pungu)	pungu
‘足’	cukut	kukut

6) コムリン語、ラナウ・クロエ語、南部諸方言、プビアン語、スンカイ語を含む。

‘犬’	kaci (一部:kuyuk)	asu
‘花’	kumbang, kam-	bunga
‘赤い’	suluh	siau
‘笑う’	lalang	maha
‘眠る’	pedom	turui (ブアイ:pedom)
‘切る’	melok, pelok	noktok
‘9’	siwa	suai
‘鶏’	manuk	sisu (ブアイ:manuk)
‘灰’	hambua (タランパダン:abu)	habu

2方言ごとの共通語彙率はばらつきがあって必ずしも区別が明瞭ではないが、ラナウ・クロエ語、南部諸方言の間で大体8割台であるのに対し、それらとコムリン語の間では大体7割台である。

筆者は先に言及したパミンギル語という名称をむしろこの(2)と(3)のグループ、すなわち一ラナウ語を含めるには意味的になお若干の抵抗はあるけれども一ラナウ・クロエ、南部の諸方言の総称として用いるのが適当ではないかと思う。総称といったのは、筆者の印象によると、この中でラナウ語とクロエ語が1下位グループをなすことは確かだが(共通語彙は約9割)、残りの方言がそれと対置できるような一つの下位グループをなすとは思えないからである。少なくともカリアンダ方言はほかとは明らかに異なっているし、<sup>7)</sup> 反対にコタアグン方言は、とくに筆者の調査資料によれば、ラナウ・クロエ語との共通性が強い。

	ラナウ・クロエ方言	コタアグン方言	カリアンダ方言	その他
‘手’	culuk	culuk	pungu	culuk
‘雨’	terai	labung	ujan	labung
‘髪’	buok	buok	wok	buok
‘果実’	wah	wah, buah	wah	buah
‘腹’	tenai	tenai	bettong	betong
‘短い’	buntak	buntak	rebbah	rebah
‘骨’	telan, tahlan	tullan	balung	tahlan, balung
‘脂肪’	taboh, gabak	taboh, gabak	taboh	taboh

さらに(4)のプビアン語も基礎語彙をみる限りこのパミンギル語のグループに含めてよいように思える。確かにプビアン語は以上のパミンギル語方言と異なった要素ももつけれども(例. ‘男’ ragah, パミンギル: bakas, ‘たくさん’ nayah, パミンギル: lamon), その程度はカリアンダ方言の場合とたいして変わらない。上例では, ‘手’ pungu, ‘雨’ hujan, ‘髪’ buok, ‘果実’ buah, ‘腹’ betong, ‘短い’ buttak, ‘骨’ tullan, ‘脂肪’ tetaboh, となっていて, プビアン語だけが特別に異なっている点はない。ただ Funke [1972] にはランポン人の下位集団としてアブン (Abung), パミンギル (Paminggir), プビアン (Pubian), お

よび西ジャワから来たというマリンガイ (Maringgai) の名が挙げられており,<sup>8)</sup> パミンギルとプビアンの間には何らかの伝統的な区別があるものと思われるので, 一応プビアン語をパミンギル語とは別にしておくのが無難かもしれない。

一方, (1)のコムリン語のグループにはコムリン語各方言のほかにはカユアグンアスリ語が含まれる。コムリン語の方言について先に述べるならば, 今回調査したタンジョングルブッ

7) その場合しばしばカリアンダ語形はアブン語と一致する。おそらくアブン語からの借用語であろう。

8) ただしそれぞれの言語に関する Funke [1972] の記述は全くまとはずれである。

ク、グヌンバトゥ (Gunung Batu), チュンパカ (Cempaka), およびクルンガンニャワ (Kurungan Nyawa) の方言の共通語彙率はいずれの2方言間でも9割ないしそれ以上で、インフォーマントが盛んに強調するほどには方言差がなかった。しかしこのうちクルンガ

ンニャワで調査したブアイ方言は語彙、音韻の両面でかなり異質であり、時としてむしろパミンギル語との共通性を示すことがある。前出(p. 472左上)の‘眠る’ pedom, ‘鶏’ manuk のほかに次のような例がある。

	コムリン語	ブアイ語	パミンギル語
(a) ‘背中’	karuyung	tundun	tundun
‘腹’	tanihi	betong	betong (一部: tenai)
‘鳥’	manuk	burung	burung, putit
(b) ‘魚’	iwak	iwa	iwa
‘たまご’	hatolui, hantolui	tahlui	tahlui, tallui, telui

上例中 (b) は音韻に関するものであるが、このほかにコムリン語独特の音韻変化として \*Ce->Co- すなわち第1音節の \*-e- (中舌母音) が -o- に変るという規則的变化があるのにブアイ方言ではパミンギル語同様この変化が生じていない (例. ‘食べる’ mengan: mongan, ‘広い’ berak: borak, ‘名前’ gelar: golar)。タンジョンルブック, グヌンバトゥ, チュンパカの方言の間ではとくに重大な差異を指摘することは難しいが, タンジョンルブックでは単音節語に o- を付加する (あるいは古い第1音節 \*e- を保持する) といった特徴が目立つ (例. ‘1’ sai: osai, ‘4’ pak: opak, ‘女’ bai: obai, ‘血’ rah: orah)。コムリン語の方言分類に関してはコムリン出身の Abu Kosim Sindapati による言語地理学的な労作 [1970] がある。それによるとコムリン語の方言は全体として一つの方言連鎖をなしているが, 大別すれば, 下流より, (1)タンジョンルブックを含むブンクラ方言 (Bengkulah), (2)タンジョンバル方言 (Tanjung Baru), (3)グヌンバトゥ, チュンパカ, チャンパンティガ (Campang Tiga) からラスアン (Rasuan), コタヌガラ (Kotanegara) 辺りまでの, コムリン語の主だった方言を含むスムンダワイ方言 (Semendawai), および (4)ムンチャクカバウ,

クルンガンニャワ, マルタプラを含むブアイ方言 (Buay) の4方言群に分けられるという。しかしその地図の上で等語線が最も濃く重なっているのは(3)と(4)の間, すなわちブアイ方言とその他の方言との境界であって, このことは筆者の上述の観察ともよく一致する。

カユアグンアスリ語は一見したところカユアグン語によく似ているが, それは相互の影響と共通の変化—たとえば \*-a<-é の変化 (例. ‘目’ mata>maté, cf. コムリン: mata, アブン: mato, -ou)など—の結果である。この言語がカユアグン語のようなアブン系の言語でないことは前出 (p. 471) のアブン語特有の語例についてみれば明らかである。すなわち, ‘歯’ ipon, ‘魚’ iwé, ‘日’ hérani, ‘太陽’ matéhérani, ‘黒い’ halom, ‘短い’ buntak, ‘何’ api, ‘どこ’ dédipé, ‘来る’ ratong, ‘焼く’ nyuah など, いずれもコムリン語, パミンギル語など非アブン系と一致している。コムリン語とパミンギル語が別形の場合は一部を除いてコムリン語の方と一致する。前出(p. 471-2)の語例では, ‘手’ pungu, ‘足’ kukut, ‘犬’ asu, ‘花’ bungé, ‘笑う’ méhé, ‘眠る’ turui, ‘切る’ noktok, ‘9’ suai, ‘鶏’ sisu, ‘灰’ habu。例外は ‘赤い’ suluh でアブン系カユアグン語からの借用であろう。さらに \*Ce->Co- の変化

（‘食べる’ *mongan*, ‘広い’ *borak*, ‘名前’ *golar*), なかんずく単音節語の *o-* 付加（‘1’ *osai*, ‘4’ *opak*, ‘女’ *obai*）がみられる<sup>9)</sup>ことはタンジョンルブックのコムリン語と最もよく共通している。約150項目についての共通語彙率もタンジョンルブックとの間が約9割で他のどの方言との間よりも高い。以上のことからカユアグンアスリ語がもともとはコムリン語であって、その方言連鎖の最も下流に位置するものであったと考えてまず間違いなさそうである。<sup>10)</sup>

ランボン州の側にもコムリン語かそれに近い方言があることは当然期待されることである。筆者は Walker [1975] のスンカイ語がおそらくその1例ではないかと考える。スンカイ語には他のどの方言にもみられない語形が少数あったり（例. ‘背中’ *kucilcil*), コムリン語よりむしろパミンギル語と一致する語が少なからずあるため、これを純然たるコムリン語の方言とみなすわけにはいかない。前出 (p. 471-2) の語例では次の語がパミンギル語の方と一致している：‘赤い’ *suluh*, ‘笑う’ *lalang*, ‘眠る’ *pedom*, ‘灰’ *hambua*。しかしどちらかといえばコムリン語の方と一致するものが多く、とくにより基本的な語にそのよ

うな場合が多いようにみうけられる。前出同所の語例では次の語がコムリン語の方と一致している：‘手’ *pungu*, ‘足’ *kukut*, ‘犬’ *asu*, ‘花’ *bunga*, ‘切る’ *noktok*, ‘鳥’ *manuk*。また上例中の‘眠る’や‘腹’ *betong*などはコムリン語でもブアイ方言とならば一致するものである。約150項目についての共通語彙率も、パミンギル語との間が7割台、コムリン語との間が8割台で、そのうちブアイ方言との共通語彙率が最も高かった（86%）。これによく似たほかの方言資料がないので断定はできないけれども、スンカイ語はコムリン語とくにブアイ方言に比較的近いものであるとはいえそうである。

今回調査したものの中ではダヤ語の位置づけが難しい。調査したのはムアラドゥア、ルンカヤップおよびブンガマヤンのマルガ・トランバワン (*Marga Tulang Bawang*) の方言で、各方言間の共通語彙率はいずれも9割以上で方言差は小さい。すでに述べたようにダヤ語はまたコムリンダヤ語とも呼ばれ、とくにトランバワンでは単にコムリン語といった。実際コムリン語との共通語彙は多く、パミンギル語とは別形でコムリン語の方と一致する例を探すこともさほど困難ではない。

	ダヤ語	コムリン語	パミンギル語
‘9’	<i>suai</i>	<i>suai</i>	<i>siwa</i>
‘乾いた’	<i>ngeluh</i>	<i>ngoluh</i> , ブアイ： <i>nge-</i>	<i>kering, nyangu</i>
‘小さい’	<i>renik</i>	<i>ronik</i> , ブアイ： <i>re-</i>	<i>lunik</i>
‘花’	<i>bunga</i>	<i>bunga</i>	<i>kumbang, kam-</i>
‘唾を吐く’	<i>mehartok,</i> <i>ngahtok,</i> <i>meheletok</i>	<i>ngahalotok,</i> ブアイ： <i>meheletok</i>	<i>lui, melui, ilui</i> (ワイリマ： <i>ngeletopi</i> )

方言対ごとの共通語彙率はいずれの場合も8割前後かそれを少々上まわる程度だが、どち

9) このことはアブン系カユアグン語にも部分的に及んでいる。

10) 一説によればかつてはシラプラウパダン辺りまでコムリン (*Komering*) 人の集落があったというが、真偽のほどはわからない。

らかといえばコムリン語、とくにブアイ方言との間の方が高い。ただしラノウ語との間には9割近くの共通語彙がある。そこで次のように考えることができそうである。すなわち、ダヤ語もスンカイ語と同様にコムリン語の古い分派であり、ラノウ語との一致が多いのは

ラナウからの影響を受けたためであると。しかしながら、より基本的と思われる語彙についてみると、コムリン語よりもむしろパミンギル語一般とよく一致するのである。パミンギルとコムリンを典型的に区別する前出 (p. 471-2) の語例では、既出の‘9’、‘花’と‘切る’ noktok (ただしルンカヤップ：melok)、『鶏』 sisui (ただしトランバワン：manuk) がコムリン語の方と一致し、『赤い』 abang が借用語であるほかは、すべてパミンギル語の方と一致する。<sup>11)</sup> すなわち、『手』 culuk, 『足』 cukut, 『犬』 kaci, 『笑う』 lalang, 『眠る』 pedom, 『灰』 hembua。このことを単にラナウ語の影響として説明するにはいささか無理があって、むしろダヤ語がもともとパミンギル語の1分派とする方が正しいのではないかとも思えるのである。

最後に、以上述べてきたところにしたがって、単なる臆測も若干まじえながら、ランボン語の発展のあとをふり返ってみよう。Funke [1972] によればアブン人はその故郷の地をラナウ湖東南方のスカブラック (Sekala Berak) と呼ばれる地方と信じており、現在の方言分布の様態からみても、これはランボン語がかつてラナウ周辺のどこかから分化、発展してきたことを示唆しているように思う。アブン人の東方移動、したがってアブン語の本格的な分離それ自体は比較的あとのことで

あるかもしれないが、<sup>12)</sup> アブン語とそれ以外のランボン語との共通語彙率は6～7割であって、ランボン語の方言分化のはじまりは1～2,000年か少なくとも1,000年前後はさかのぼるものと思われる。東方に移動したアブン語はランボン州中部、東部の各地に拡散するが、残ったランボン語もすでにコムリン、スンカイ語のグループ、パミンギル、プビアン語のグループなどに分化し、あるいはその中間にダヤ語が形成されていたかもしれない。このうち第1のグループはアブン語同様に移動、分化しつつ、一部は一マルタプラかどこかでコムリン川流域に達する。コムリン語はそこから主として下流の方向に分村の繰り返しなどによってカユアグン辺りまで分布範囲を広げ、同時に方言連鎖の形で分化していく。ここで先のアブン語の一部が北にも移動し、カユアグンにおいてコムリン語と出会った結果、カユアグン語とカユアグンアスリ語が形成されるのである。一方、上の第2のグループでは、おそらくプビアン語が最初に分離、それに引き続いてパミンギル諸方言がスマンカ川とかその他のルートで南方へと拡散、分化していくのであるが、ラナウ語はその意味ではいわば居残り組である。しかしダヤ語がこの居残り組から派生したものか、あるいはもっと前にすでに分化していたものかは残念ながらはっきりしない。

### III 南スマトラ州のマレー語

南スマトラ州のマレー語の方言分類についてはすでに先の章でその大要を述べた形になっているから、ここでは具体例を示しつつ若干補足するにとどめたい。

南スマトラ州マレー語は全体に方言差が小さく、その差異が借用語によるものであった

11) むろん音韻変化の上でのコムリン語的特徴もない。

りすると通時的分類の根拠はいよいよ少なくなってしまう。その点、ムシ語、ラウス語のグループと高地マレー語との間の相違は比較的是っきりしている。前者には、私の資料では、スカユ、ババットトマン、ムアラクリンギ、ムアラサリン、ムアラルピット (ラウスイリル) の方言が含まれ、後者にはパス

12) Funke [1972] はこれを15世紀半ばとしている。

マ語, スムンド語, ルマタン語, エニム語, キキム語, リンタン語, トゥビン語が含まれ

るが, この2グループ間の相違はたとえば次のような例にみることができる。

	ムシ, ラウス語	高地マレー語
‘髪’	rambut, yambut	gumbak
‘耳’	telingé,-ék,-o	cuping (キキムほか: telinge,-é,-o)
‘足’	kaki	keting
‘ひざ’	lutut, lo-	lentuut, entuut, tuat
‘犬’	kuyuk, ko- (ラウス: anyéng)	anjing
‘太った’	gemok	bunguk (一部: gemuk,-ok)
‘人’	uyang, uang	jeme,-é,-o
‘ここ’	disikak,-hikak,-siko	disini
‘短い’	péndék	pandak
‘緑’	ijau	ijang (一部: iju<パレンバン)
‘軽い’	ingan	ampung
‘唾を吐く’	meluda, ma-	belioy,-uy,-ou
‘泣く’	nyemulung,-mo-	nangis (リンタン: nyemulung)

約170項目の基礎語彙について調べた共通語彙率は, 各グループ内部では9割前後からそれ以上, 両グループ間では大体8割前後であった。

すでに述べたように, パレンバン周辺でもブリダ語, ムランジャット語やおそらくプガガンイリル語もムシ語, ラウス語に近いものであり, トルンスラパンのカユアロー方言もそうである。いちいち語形を挙げることは省略するが, 資料のないプガガンイリル語は別として, これらの方言では上例でも大部分がムシ語のグループと一致している (とくに‘ここ’ disikak, disiko)。例外は‘犬’ anjing, anjéng (ただし, ブリダ: koyok) と‘泣く’ nangis, nangés (ただし, カユアロー: nyemolung) くらいのもので, これとて共通マレー語的であるというだけで, 積極的に高地マレー語的というわけではない。ただしこれらの方言にはパレンバン語の影響, ないしはおそらくそれを通じてのジャワ語の影響が少なからずある (例. ‘尾’ buntut)。

上例中, 一部を除いて明らかにムシ語のグループの方が高地マレー語にくらべて標準的

な半島マレー語(したがってインドネシア語)とよく共通している。これはこのほかの語彙についても, 若干の例外や音韻的相違はあるけれども, 一般によくあてはまることである。リアウマレー語の範疇にどこまで含めるかはいささか問題があって必ずしもこの名称の使用をいさぎよしとはしないのであるが, 仮に漠然と最も普通のマレー語の方言群とするならば, このムシ, ラウス語のグループがリアウマレー語の一種であることは疑いがない。<sup>13)</sup> そうすると, 単なる地理的理由にすぎないことではあるが, このグループがパレンバンからムシ川沿いにさかのぼって広がったと考えるよりも, 具体的なルートはともかくとして, 方向としてはジャンビの方から移り広がったと考える方がより自然であるように思われる。

パレンバン語も本来はムシ語などに近いものと思われるが, いささかその様相を異にする。パレンバン語とその周辺の方言は, 先に

13) Voorhoeve [1955] につけられた Esser の地図ではスマトラ東岸寄りのマレー語はパレンバン語も含めて, スマトラマレー語 (Sumatra Malay) と呼んでいる。

も述べた通り、多数のジャワ語借用語によって特徴づけられる。生粋のパレンバン語ではたとえば次のような例をいくつも挙げることができる：‘頸’ gulu, ‘魚’ iwak, ‘花’ kem-bang, ‘水’ banyu, ‘葉’ godong, ‘根’ oyot, 等等。このほか本来のマレー語とも同源であるが形がジャワ語形であるもの（例．‘人’ wong, ‘蛇’ ulo), ジャワ語的音韻変化を経ているもの（例．‘夜’ malem, ‘吸う’ ngisep) などもある。また語末の \*-a>-o の変化もパレンバン語の場合はジャワ語の影響であるかもしれない（例．‘目’ mato)。約160項目の基礎語彙について調べると、もとの共通残存語も含めると約半数近くがジャワ語と一致するものであった。<sup>14)</sup> ムシ川下流のムアラトランの方言はほとんどパレンバン語と同じであるし、河口部に近いスンサンの方言は若干様相が異なるけれどもパレンバン語と同じ程度にジャワ系借用語がある。

それではこのジャワ語化されたパレンバン語がもともとどのようなマレー語であったかということ、ジャワ語の影響が長年月の蓄積であるとすれば、それは高地マレー語やムシ語などの方言に分化する以前のマレー語であった可能性もむしろあるわけである。しかし高地マレー語的な特徴が全くみあたらないということは、この言語がすでに高地マレー語とは異なった、本稿にいうところのリアウマレー語の一種であったと考えて差し支えないのではないかと思う。前出 (p. 476) の語例では、次の (a) がジャワ系借用語、(b) が本来のマレー語であるが、(b) のうち積極的に高地マレー語特有といえるものはない。

- (a) ‘耳’ kuping, ‘足’ sikil, suku, ‘ひざ’ jengku, ‘人’ wong (スンサン：urang), ‘緑’ iju, ‘軽い’ énténg, ‘唾を吐く’ beridu

- (b) ‘髪’ rambut, ‘犬’ anjing, ‘太った’ gemuk, ‘ここ’ disini, ‘短い’ péndék, ‘泣く’ nangis

しかしこのことは必ずしもパレンバン語がムシ語のジャワ語化したものであることを意味するわけではない。むしろ、パレンバンの歴史的な性格からして、各地のリアウマレー語とジャワ語が寄与しあって形成されたと考える方が現実的であるように思う。

一方、高地マレー語の方は語彙面で普通のマレー語と種々異なっており、これをもリアウマレー語の一種とってしまうにはいささか差異が大きすぎるように思う。しかしラウス、ムシ語との共通語彙は大体8割前後、せいぜい1,000年前後のへだたりであって、時としてなされるようにこれをマレー語とは別の言語としてマレー語、ランボン語などと対置するのはいささか誇張だといわねばならない。高地マレー語がどこからどういうルートで南スマトラ高地に分布するようになったか、今のところそれを確実に推測する手掛りはない。しかしいったんこの地方に出現してからは、いわゆるパスマ地方を中心にそこから四方に広がったという形跡がある。先にも述べたように、スムンド語、ルマタン語、エニム語、キキム語、リントン語、スラウエイ語といった方言がちょうどパスマ語を中心として四方に分布しているからである。このうち西北方のキキム、リントン、トゥビン語のグループは、おそらくムシ語との接触あるいは部分的混交によって、高地マレー語の中ではムシ語との共通要素がとくに多い方言である（例．‘耳’ telinge, -é, -o, 他の方言は cuping)。

オガン語のグループ、すなわちオガン語とプガガンウル、プダマランなどの方言は、おそらく高地マレー語と比較的近い関係にある。必ずしも完全に高地マレー語的というわけではなく、その特徴を欠く部分も少なからずあるが、典型的な高地マレー語的要素を比較的

14) もっとも、ジャワ系借用語が最も少ない高地マレー語でも、共通残存語を含めると3割強がジャワ語と一致する。

よく共有しているのである。前出 (p. 476) の語では、次の語が高地マレー語と一致している：‘髪’ gumbak, ‘耳’ cuping, ‘足’ keting, ‘ひざ’ lentuat, entuat, ‘犬’ anjing, ‘人’ jeme (オガンの一部のみ), ‘ここ’ disini, ‘短い’ pandak, ‘軽い’ ampung (オガンの一部のみ), ‘唾を吐く’ beliux (同), ‘泣く’ nangis, nangés。例外は、‘太った’ gemok, ‘緑’ ijau と、オガンの一部を除く方言で ‘人’ uxang, uhang, ‘軽い’ énténg (<パレンバン), ‘唾を吐く’ beluda, meluda である。また、上例中でもそうであるが、同じオガン語のグループの中でも下流のプガガンウル、プダマラン語よりも上流のオガン語の方がより高地マレー語の要素をよく保っている。これらのことは、

このグループが高地マレー語の比較的古い分派であり、オガン川沿いに下流へと分布範囲を広げていったものであることを示唆しているように思われる。

最後に、さらに下手にあたるシラプラウパダン、パンパンガン、トゥルンストラパンなどの方言について言及しなければならない。このうちパンパンガン語は、少なくとも筆者の資料では、若干の特徴を除いて極めてパレンバン語に近い（したがってジャワ語要素が多い）が、シラプラウパダン、トゥルンストラパンの方言はそれと同時にしばしば高地マレー語的要素が目につくのである。たとえば次の例で (H) と記したものがそれであり、(J) はジャワ系借用語を表わす。

	パンパンガン	シラプラウパダン, トゥルンストラパン
‘髪’	rambut	rambut
‘耳’	kuping (J)	kuping (J)
‘足’	keting (H) / sikil (J)	keting (H)
‘ひざ’	jengku (J)	tuat (H)
‘犬’	anjéng	anjing
‘太った’	gemok	gemuk, -ok
‘人’	wong (J)	uang
‘ここ’	disini	disini
‘短い’	péndék	péndék / pandak (H)
‘緑’	iju (J)	iju (J)
‘軽い’	énténg (J)	ampung (H)
‘唾を吐く’	meluda	meluda, beluda
‘泣く’	(me-) nangis	nangés

一つの可能性は、いうまでもなく、これらの方言、少なくともシラプラウパダン、トゥルンストラパンの方言がもともと高地マレー語に近いものであり、のちにパレンバン語の影響を強く受けたものだという事である。そ

の場合、それがオガン語のグループのさらに分派であるとすればそれなりにすっきりするのであるが、微妙なところでそうとは思われないふしがある。たとえば次のような例を比較するとよい。

	シラプラウパダン, トゥルンストラパン	オガン, プダマラン, プガガンウル	高地マレー語
‘水’	ayék	ayax, aih	ayék, ayik
‘唇’	bibiu	bibix, -h	bibiy, -u
‘鳥’	burung	buxung, -h-	burung

とするとこれらの方言がオガン語とはまた別の高地マレー語の分派ということになるのだが、この考え方にはいささかの抵抗を感じざるをえない。それよりもむしろ次のように考えられないだろうか。すなわち、仮に高地マレー語がパスマ地方から四方に広がったこと、オガン語のグループから上流から下流へ分布範囲を広げたことが事実であったとしても、それは比較的最近の歴史に属するものであって、それ以前には、パレンバン語の母体とな

ったリアウマレー語、どこにあったかは分からないが現在のシラプラウパダン、トゥルンストラパンの方言のもととなったマレー語、オガン語、そして高地マレー語が方言連鎖を形成するような形で分化していったのではないか、ということである。このような考え方は、また、高地マレー語の来源についても一つの示唆を与える。もっともこの辺りのことになるともはやこれといった根拠を探ることが難しく、ほとんど臆測の域を出ないのである。

#### 参 考 文 献

- Abu Kosim Sindapati. 1970. Local Dialect Variations in Komerling. Thesis. IKIP Malang.
- Voorhoeve, P. 1955. *Critical Survey of Studies on the Languages of Sumatra*. Haag.
- Walker, Dale F. 1975. A lexical study of Lampung dialects. In *Miscellaneous Studies in Indonesian and Languages in Indonesia*, edited by John W. M. Verhaar, pt. 1, pp. 11-22.
- . 1976. *A Grammar of the Lampung Language: the Pesisir Dialect of Way Lima*. Jakarta.
- Funke, F. W. 1972. Abung. In *Ethnic Groups of Insular Southeast Asia*, edited by F. Le Bar, et al., Vol. 1, pp. 35-38.
- 三谷恭之. 1977. 「タイ・カダイ諸語の言語年代学的考察」『東南アジア研究』15 (3) : 421-429.